

水平床における孤立性段波の変形過程に関する研究

東北大学工学部 正会員 岩崎 敏夫
東北大学文理院 学生会員 鈴木 義和
東北大学文理院 学生会員 ○栗田 晃

1. まえがき 初期波の波高がソリトン分裂を起す過程で、ある波高に増加するまで波などの程度へ距離を伝播するかを知ることは、現実問題として意味のあることである。発生した波が幾つかのソリトンに完全に分裂するまでの距離をえり分け距離というが、我々は初期波の波高が定常になる前のある波高に達するまでの距離を一種のえり分け距離と考えて実験から初期波に対する関係を求め、結果を対応するに適用してみた。

2. 実験結果と考察 本実験では既報の東北大学100m水路を使用した。造波は造波板を水平方向に一回限り移動させて行う。造波した波は碎波の起らない波である。造波された波は水路端から23mの地点を過ぎると波高の増加が起りピークに達し以後、波高はほぼ一定のまま伝播していく。我々は波高の増加が直線的に生ずるものと考えて各実験ケースについて最も代表的と思われる波高増加率を図1に示す。直線的に波高が増加したと仮定した場合に最大波高になる地点とその地点との実験による波高の差は大部分が数%であることが認められ、この仮定は妥当なことであると思われる。図中の実線は実験から得られた最大と最小の増加率 α_u , α_L である。

$$\alpha_u/h = 1.70(H_0/h - 0.1) \times 10^{-2} \quad \text{--- ①}$$

$$\alpha_L/h = 1.27(H_0/h - 0.1) \times 10^{-2} \quad \text{--- ②}$$

$H_0/h < 0.1$ では、ソリトン分裂による波高の増加は考えていない。

Hammackは、分裂の水平スケールであるえり分け距離 ds を代表的水平長 l にとって以下のように導いている。

$$ds = ts\sqrt{gh} = lh/H_0$$

$$ts = l/S \quad S = \sqrt{gh} H_0/h$$

ここで、 ts はえり分け時間、 S は最大波高と最小波高のソリトンの相対位相速度、 H_0 は初期波の波高である。Hammackは l として初期波の波長 λ にとっているが、このえり分け距離はソリトン分裂が完了する距離を示すものと波高増加の点から見た場合扱いにくい。

Munkは、ソリトンが孤立波の全エネルギーの99%を含む長さを有効波長と定義した。先導ソリトンの最大波高が $2H_0$ になるとときの有効波長を水平長 l_{eff} とすればえり分け距離 ds_{eff} は次のようになる。

$$ds_{eff} = ts\sqrt{gh} = l_{eff} h/H_0$$

$$l_{eff} = 3.629(H_0/h)^{1/2}$$

これを図2中に実線で示す。また我々は $H_{max} - H_0$ に対して20%の波高増加があらかじめ定義した。前述のとおり波高が増加したと仮定したときに H_{max} に達するまでの距離を X_{max} とした。つまり、 $ds_{20} = 0.2X_{max}$ である(図3)。図2中に $(ds/h)_{20}$, X_{max}/h の実験値をプロットしてある。----と----は偏差の二乗和が最小となるように近似したもので、以下の式で表わされる。

$$X_{max}/h = 5.0/(H_0/h - 0.1) + 37.0 \quad \text{--- ③} \quad (ds/h)_{20} = 0.2 X_{max}/h \quad \text{--- ④}$$

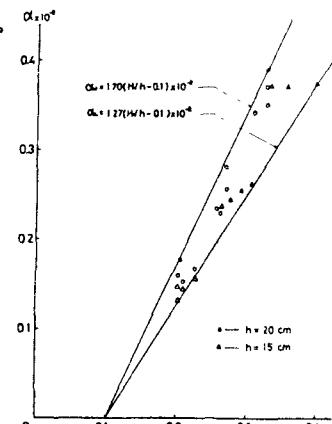


図 1

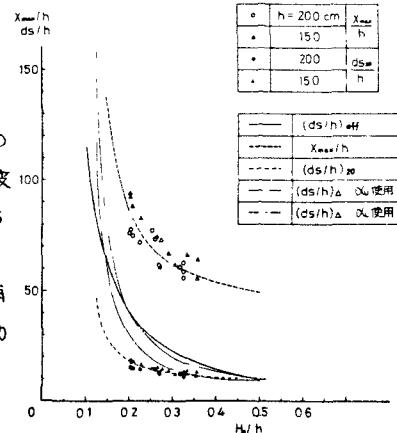


図 2

ds_{20} の考え方とは波高の増加量が小さな場合でも20%の増加は当然生じ H るので、波高の絶対量ということから考えれば同じ20%の増加でもそれを H_{max} とすれば大きさが異なる。そこでは波高の絶対量を考慮したえり分け距離として波高の増加量 $H - H_0$ と水深 h との比が0.05になる距離 ds_{Δ} を定義した。波高が α 倍増加すると考えるの $H = \alpha \cdot X + H_0$ であり、えり分け距離 ds_{Δ} は以下のようになる。

$$(H - H_0)/h = \alpha \cdot ds_{\Delta}/h \quad \text{よって } ds_{\Delta}/h = 0.05/\alpha$$

前述の ds_{Δ}, dL により、最小と最大の ds_{Δ} が決定され、それそれ

$$(ds/h)_a|_L = 2.94/(H_0/h - 0.1) \quad (ds/h)_A|_L = 3.94/(H_0/h - 0.1)$$

である。これを図2中に $---$ と $---$ で示してある。図2より $(ds/h)_a|_L$ は H_0/h が0.3以上では ds_{20} と同じオーダーであるが、 H_0/h が小さくなると ds_{Δ} は長くなり、およそ H_0/h が0.15以下になければ ds_{Δ} よりも長くなる。このことは、 H_0/h が小さいところでは波高増加が20%になっても波高の絶対量としてはさほど大きくなっていないことを意味している。

最後にモデル化を行った気仙沼湾について、以上述べた3種類へり分け距離と湾奥での波高を求めてみた。求め方のフローチャートを図4に示し、その結果を表1に示す。外海で発生した波はグリーンの式により湾口に達し、湾口から湾奥まで水深は湾口の水深とする。また、湾内では慣れ効果は考慮していない。初期水深は $h_0 = 500m$ である。湾口で $H_0/h < 1.1$ の波はソリトン分裂による波高増加は考慮せず表中一 X 表示。表中 \times は湾奥波高とチェック欄は、湾長を X としたとき、次のようにある。

$$\text{もし } X > X_{max} \text{ のとき } H_L = x_L X_{max} + H_0 \quad H_L = \alpha L X_{max} + H_0 \quad (2)$$

$$X_{max} > L > d_{20} \quad H_L = x_L L + H_0 \quad H_L = x_L L + H_0 \quad (3)$$

$$d_{20} > L \quad H_L = d_{20} L + H_0 \quad H_L = x_L L + H_0 \quad X$$

気仙沼湾では湾内の海底が水平に近く20mを湾内水深にとどく。全ケースで湾口で $H_0/h < 1.1$ となり波高は分裂増加する可能性があり、 $X > X_{max}$ であるかで湾内で分裂が完了することが予想される。

しかし、あわせて以上述べたことをここにまとめておき

よし、ソリトン分裂による波高増加はほぼ直線的であると言ふ。えり分け距離として有効波長によるもの、波高増加が20%の距離をこなすも、波高増加量 αL に対する比が2.7~2.9倍の距離をこなすも、3種が各これ、波高の増加を問題にするときは、後二者が扱いやすいと思われる。現実問題をこなすえり分け距離を考えるには、海岸が水平であると仮定することから無理があると言ふが、湾内での波の運動の大さっぽな目安になると思われる。

本論文にまつめに当たり、東北大学教授 首藤伸夫博士には有益な御助言を頂いた。また、東北大学学生青木信也君には実験・解析に協力して貰いた。ここに感謝の意を表す。

参考文献 1) Hammack and Longuet, The KdV eqn. and water waves. Part 2, J.F.II, vol. 5, 1974

2) 岩崎、鈴木、孤立性緩波の変形過程に関する研究 昭51年度東北支部技術研究会講演概要

3) H.H. Helfgott, The solitary wave theory and its application to surf problems, Ann. N.Y. Acad. Sci., 51, 1949

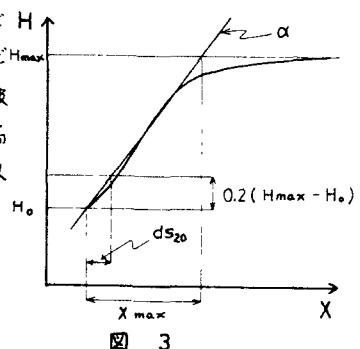


図 3

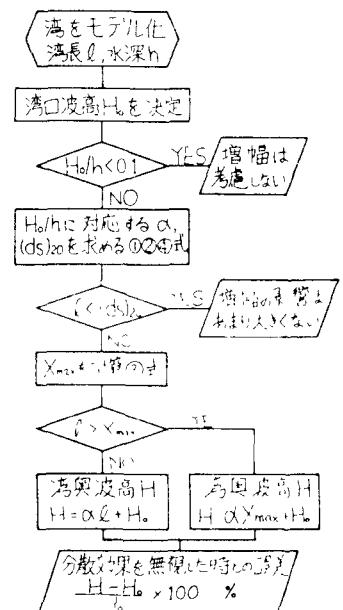


図 4

表 1

X	H_0/m	H/m	H/L = 0.05		H/L = 0.1		H/L = 0.2		H/L = 0.3		H/L = 0.4	
			L/m	ds_20/m	L/m	ds_20/m	L/m	ds_20/m	L/m	ds_20/m	L/m	ds_20/m
1	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600	1.600
2	5.0	5.18	0.559	192	1.74	128	2.72	960	6.67	16.78	1.6	①
2	4.0	4.94	0.447	206	2.43	164	2.27	130	15.02	13.48	1.68	②
3	3.0	6.71	0.335	233	3.74	250	3.35	1165	11.36	10.19	1.69	③
4	2.0	4.47	0.224	309	5.65	474	6.35	54.5	7.73	6.96	1.73	④
5	1.0	2.24	0.111	915	15.95	4500	16.67	9075	4.79	3.82	1.62	⑤